

# 博士論文審査報告書

## 論文題目

古代ジャワのチャンディの伽藍構成に関する研究  
ヒンドゥー教寺院の非対称伽藍について

## 申請者

氏名

小野 邦彦

専攻・研究指導  
(課程内のみ)

2004 年 3 月

インドネシア、ジャワ島のヒンドゥーないし仏教の遺構（チャンディ）に関する建築史的研究は、オランダ植民地政庁のもとに組織されたオランダ領東インド考古局により緒が付けられた後、フランス極東学院、そしてわが国の東南アジア建築史研究の開拓に多大な功績を残された千原大五郎氏を含めて、さまざまな視点から研究の推進が試みられてきた。主な成果として、1. チャンディの地理的分布、宗教的類型、建築構成の基本型、インドにおける祖形、中部ジャワ史諸説と建築史との関連などに言及した基本的・概括的な研究、2. 細部意匠、モールドイング、平・立面の類型的分析に基づく様式編年研究、3. 遺跡に残された痕跡調査に基づく復原編年研究などがあげられる。しかし一世紀以上にもわたる研究史を持つにもかかわらず、研究者の絶対数が不足していたこともあり、テーマによって研究の達成度にむらがある認められ、また個々の問題の所在は明らかになったとはいえ、各論の深化に応じた体系化が十分に成されているとは言い難い。

本論文の著者は、以上の状況を踏まえて、これまでに大きな関心を集めながらも、深く掘り下げた考察が不足し、また基礎的な実測調査研究すら不充分であったヒンドゥー寺院の伽藍構成の問題に着眼している。その伽藍における祠堂群の配置は、シヴァ神を祀る主祠堂を中央に配して対称的に整然と並べられるが、わずかながら祠堂群全体は南北方向へとずらされている。規模の大きな遺構では、視認することすら困難な一見些細とも思われるこの祠堂群の「ずらし」に、著者が焦点を絞って本論文をまとめている理由は、その現象の背後に、インド文明の鍵となる重要なシンボルに加えて、ジャワにおいて内的・自律的な発展をとげた宇宙観とが重層的に潜在しており、ジャワのヒンドゥー寺院空間を理解する上での最重要課題の一つと意義付けられるからである。以上の問題意識の上に立って、本論文では、当該伽藍を「非対称伽藍」と呼び、その成立の経緯、またそこに投影された象徴的意味・空間的特質などが、インドの建築書の読解、仏教寺院の伽藍構成との比較、さらにバリ島の神観念をも視野に入れつつ考察されている。

本論文は、序論3章、本論5章、結論からなる。序論では、「非対称伽藍」に関する従来の研究の成果と問題点を洗い出し、それに対する筆者の視点を明らかにしながら、上述のような本研究の目的および本論文の構成について述べている。

本論は、序論3章の基礎的な考察をうけて、「非対称伽藍」について体系的にまとめたものである。

第1章では、「非対称伽藍」の空間的特質について以下のように明らかにしている。方形の圍繞壁によって取り囲まれた伽藍の中央に、原則としてシヴァを祀る主祠堂が西ないし東面して配され、またそれに正対して三基の副祠堂が配置されること。祠堂群は北側へずれる傾向が看取されること。寺院敷地の中心点と、主祠堂の正面階段翼壁（ないし正面突出部の側壁）と基壇の交差する隅の部分とが、概ね一致する傾向の認められること。さらにその敷地中心点に、リング状立

石などの置かれる事例が認められることなどである。また以上の諸点に鑑みれば、寺院敷地の中心点を避けるべく、祠堂群全体がずらされていると見る既往の論説は概ね是認されること。また八方位に位置する地点も同じように聖別されていると見られること。そしてこの種のヒンドゥー寺院は、中部ジャワ南部から東部ジャワにかけて広範な分布を見せ、さらにその推定建立年次は8世紀前半から13世紀末までの長きにわたることなども述べている。図面などの具体的な資料に照らして、伽藍の非対称性が悉皆的に検証された研究例は無く、それに対し本章では、著者が作成した伽藍配置図を基に実証的な検証を行っている点が評価される。

第2章は、「非対称伽藍」が、いつ頃、どのような過程を経て成立したと見られるのかという従来等閑視されてきた問題を考察したものである。中部ジャワ北部山間地の遺構群との比較の上、古式を残すとされるそれらの遺構群に見るモルディング、基壇の型式が、発達南下して新たな展開を見せた結果、遅くとも732年頃までに、半円線形を有するモルディングの構成、浮彫りや線形を一切持たない「平滑型」の基壇が中部ジャワ南部に創出され、またその様式的な変遷に伴って、「非対称伽藍」が成立するに至ったと考えられる点を明らかにしている。ここでは、従来の諸説に改訂を加えて、年代順南下説の妥当性が説かれている。

第3章では、インドの諸文献の読解を通じて、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと「非対称伽藍」との関連を考究している。インドに現存する建築書のほとんどに、かなりの分量をもって詳細に記述されているのが地鎮祭儀礼であるが、この儀礼の中では、世俗の建築、また宗教建築を問わず、それらを造営する際に、その建設用地の上にグリッドに区切られた正方形の図形を描き、またそこでヴァーストゥ・プルシャと呼ばれる土地を支配する一種の精霊と、様々な神々が勧請されて供養を行うことが記されている。この時に描かれる8×8、9×9などのグリッドとして表された図形はヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと呼ばれる。そしてマンダラの特定の地点、なかんずく中心点を含む中央区画の内外の地点を、ヴァーストゥ・プルシャの身体上の脆弱な急所に見立て、その地点上に神像や建物を置くことをタブー視するという文言が記載される場合がある。こうした「急所」の規定に類する観念に基づき、ジャワのヒンドゥー寺院においては、敷地中心点が特別視され、なおかつ避けられていると見る既往の解釈を追認している。それに加えて、南インドの代表的な文献である『マヤマタ』に記述されたマンダラを基本とするグリッドに勧請された諸神の配置と、チャンディ・ロロ・ジョングラン内苑に配せられた諸神の配置とに、一定の共通した規則性を認められる点などは、このマンダラに類する神観念が、ジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になることを論述している。また関連文献の読解により、避けられるべき箇所として位置付けられる空間上の「中心」は、古代インド思想における始源的な原理であり、大宇宙の中心とされる「梵」の観念に関連付けられているという理解を著者は導き、ジャワのヒンドゥー寺院においても、聖別された敷地中心

点に「梵」の概念が表象されていると見なし得ることを指摘している。

しかし一方で、ジャワのヒンドゥー諸寺院の敷地の中心点、そして八方位に位置する地点に置かれたリング状の立石を、そのままシヴァないしその別神格と見た時に、チャンディ・ロロ・ジョングランの図像的空間は、バリ・ヒンドゥーにおいて宇宙を表象するナワ・サンガの観念に酷似している点を論じた上、インドの「梵」の観念に関連して「急所」として避けられた寺院敷地の「中心」、すなわち象徴的な宇宙の中心に、重合的にシヴァ神が立てられている可能性についても考察している。この著者の指摘は、これまで不分明であった「中心」に投影された神観念に関して、新しい解釈を提示したものとして評価される。

第4章では、上記のナワ・サンガの観念が、古代ジャワから連綿と続く神格の配置原則の延長上に位置付けられることを実証している。まず、中央に座すシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを配する「三神の体系」に、東西を司るシヴァの別神格である二神が加わり「五神の体系」へと展開し、さらに四維に同じく四柱のシヴァの別神格が加わり「九神の体系」を成し、より一層組織的な方位神の体系がジャワで成立するに至り、それがナワ・サンガの観念へ継承されたと考えられること、またチャンディ・ロロ・ジョングランのヒンドゥー教図像も同じ文脈の中に位置付けられることを論述している。

第5章では、中部ジャワの重要な仏教寺院四例について、伽藍の対称性という観点からヒンドゥー寺院との比較検討を行っている。仏教寺院では対称性が強く意識されていることを確認した上で、そのような対称伽藍は、ジャワにおける仏教の思想と、それに伴う尊格の構成原理と密接に関連するものであり、伽藍を左右ないし四方対称とすることには必然性を認め得ることを述べ、逆に言えばヒンドゥー寺院の「非対称伽藍」は、ジャワにおいてはヒンドゥー教の諸遺構に固有の配置形式であると推察される点を指摘している。

本論5章において考察し、解明した内容を要約し、本論文の結論としている。

以上を要するに、この著者の研究は、古代ジャワのヒンドゥー教寺院の非対称伽藍について、精緻な実証研究に耐え得る資料を整備し、遺構例を網羅した上、重層的に分析して総括的に記述し、その象徴的意義を解明したものだといえる。東南アジアおよび南アジアのヒンドゥー寺院を理解する上で、重要な新視点を提示し、研究方法を前進させたこととあわせ、建築学に寄与するところが大きい。よって本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。

平成16年2月

|    |         |      |    |    |
|----|---------|------|----|----|
| 主査 | 早稲田大学教授 | 工学博士 | 中川 | 武  |
| 副査 | 同       |      | 石山 | 修武 |
| 同  | 同       |      | 古谷 | 誠章 |